

【静岡県】 逢初川水系河川整備基本方針 整理表

河川及び流域の現状

河川及び流域の現状

- 逢初川は、その源を静岡県熱海市の北部に位置する岩戸山(標高約734m)南麓に発し、伊豆山地区を貫流して相模灘に注ぐ、流域面積1.9km²、幹川流路延長1.3kmの二級河川である。
- 年間降水量は、平均降水量で2,013mm(網代特別地域気象観測所)、全国平均1,612mmを上回る。
- 流域の地形は、上流域は湯河原火山の侵食により形成された中起伏の火山地であり、沿川には崖崩が見られる。
- 逢初川の河床勾配は1/3~1/10程度と全川に渡り急勾配で、平常時の水の流れも速く、開水路部はコンクリート三面張り構造である。周囲に住宅のある中流部の一部区間では生活道路の下を暗渠で流れている。
- 流域の土地利用は、平成28年時点で森林が約74%を占め、中流域から下流域にかけて分布する市街地は約19%、農地は約6%(平成28年度)を占めており、経年的な変化はほとんどみられない。
- 近年、上流域の山地部では、太陽光発電施設が設置されるなど土地利用状況の変化がみられる。
- 流域を含む伊豆山3地区の人口は、約2,300人(平成27年)で、世帯数は約1,100世帯である。
- 流域にある伊豆山神社は、源頼朝奉兵など数々の歴史の舞台になるとともに、全国的に有名な修験道の霊場として栄え、木造男神立像等、多くの文化財が遺されているとともに、4月の例大祭等の行事が催され、本地域の文化の中心となっている。
- 伊豆山地区は、1,300年前に発見されたとされる「走り湯」を中心に発展してきた伊豆山温泉や相模灘を見下ろす風光明媚な景観などの観光資源を活かし、現在も観光業を中心とした地区である。
- 流域の交通は、下流部にJR東海道新幹線、JR東海道本線、国道135号、熱海ビーチラインなどの重要交通インフラを抱えている。中流域の住宅地は市道伊豆山神社線と下流の国道135号を結ぶ市道岸谷本線が暗渠化された逢初川の上部を通る生活道路として利用されている。
- 熱海市都市計画マスタープラン(2018年 熱海市)では、流域の一体的な治水安全度の確保、良好な景観形成を図る海岸線と主な河川の水辺空間を「水辺の連携軸」と位置付けており、逢初川は「水辺の連携軸」に指定されている。

水系の特徴(着眼点)

急峻な山あいを流下する地形特性から、全川に渡り極めて急勾配であり、平常時、洪水時ともに流速が速い。中流部は一部で道路下を暗渠構造で流下しており、土砂や流木等による閉塞が懸念される。下流部はJRや国道などの重要交通が通る市街地になっており、災害ポテンシャルが高い。

上流域の山地部では、太陽光発電施設が設置されるなど土地利用状況の変化がみられる。

流域には文化財・温泉等の観光資源が多く、地域住民だけでなく観光客の安全確保が必要である。

逢初川の現況流下能力は、中流部の暗渠区間で低く、年超過確率1/2程度を下回っている。

静岡県第4次地震被害想定におけるレベル1津波に対しては、人家等の浸水は想定されていない。レベル2津波に対しては、住民や観光客等の避難対策が必要である。

全川に渡り極めて急勾配なため、平常時の流速が速い。

上流部は、河川沿いの植生が良好な環境を形成している。

中下流部は、三面張りコンクリート護岸や暗渠構造などの人工物で構成されている。

急峻な山地からの雨水を海まで流す構造で、中下流部の住宅地周辺は暗渠構造となっている区間も多く、河川利用や河川に親しむことは困難である。

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川整備の基本理念(案)

《基本理念》

逢初川は、山岳信仰と修験道の霊場として栄えた伊豆山神社の傍ら流れ、現在は温泉観光地でもある伊豆山地区において、極めて急峻な地形条件の中、大きな浸水被害を受けることなく、地域を支えてきた河川である。

しかしながら、中下流部には河川沿いに住宅が立ち並び、東海道新幹線や東海道本線、国道135号等の重要基幹交通網が横断しており、災害リスクの高い地区となっている。

気候変動に伴い頻発・激甚化する水害・土砂災害等への対応が求められる中、令和3年(2021年)7月豪雨で、逢初川上流域で発生した大規模な土石流が死者・行方不明者27名という未曾有の被害をもたらしたことを教訓とし、水害や土砂災害等の水災害に対して強く安全で安心な地域づくりが求められている。

また、逢初川は住宅地と河川との距離が近く、生活空間に寄り添った河川であり、加えて、由緒ある伊豆山神社や走り湯、逢初橋などの観光資源にも恵まれ、温泉やホテル等も多いことから、地域の暮らしや観光地としての景観等に配慮した整備をしていくことが重要である。

これらを踏まえ、逢初川水系の河川整備における基本理念を次のとおり定める。

住宅地、観光地を貫流する逢初川流域では、流域の土地利用状況に注視しつつ、洪水や土石流等の災害による被害の防止または軽減を図る。また、伊豆山地区の歴史・文化や温泉等を資源とした観光地を流れる河川であることから、伊豆山地区のまちづくりと調和した、安全・安心な地域を支える川づくりを目指す。

河川整備の基本方針(案)

■洪水・津波・高潮等による災害の発生防止または軽減に関する事項

<洪水対策>

災害の発生防止または軽減に関しては、河川の規模、既往の洪水、流域内の資産・人口等を踏まえ、県内の他河川とのバランスを考慮し、年超過確率1/30規模の降雨による洪水を安全に流下させることのできる治水施設の整備を目指す。なお、河川整備においては、背後地の土地利用形態や現況治水安全度の上下流バランスに十分に留意して河川整備を進める。

また、流域における土地利用計画との調整や土地利用の適正化に関する指導、砂防事業や治山事業との調整や連携、森林保全・農地保全の働きかけ等を通じて、流域内での総合的な水災害対策を推進する。

<超過洪水対策>

さらに、気候変動の影響等による想定を超える洪水や、整備途上段階での施設能力以上の洪水が発生した場合においても、被害をできる限り軽減するため、平常時より熱海市や住民等と連携し、要配慮者や観光客などを含めた防災情報の伝達体制や避難体制の整備、防災教育や防災知識の普及活動など、「自らの命は自ら守る、自らの地域はみんなを守る」とする自助・共助・公助による地域防災力の充実、強化を図り、流域のあらゆる関係者と協働して、防災・減災対策に取り組む。

<津波対策>

河川津波対策に関しては、静岡県第4次地震被害想定に基づく「レベル1の津波」による浸水被害は想定されていない。

ただし、発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす「レベル2の津波」を「最大クラスの津波」とし、これに対しては、施設対応を超過する事象として、地域住民や観光客等の生命を守ることを最優先とし、熱海市との連携により、土地利用、避難施設、防災施設などを組み合わせた津波防災地域づくり等と一体となって減災を目指す。

■河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持及び河川環境の整備と保全に関する事項

<河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持>

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関しては、流況の把握に努め、健全な環境の維持や美しい景観の形成の観点も加え、土地の適正利用、森林や農地の保全、生活排水等の適正処理について熱海市などの関係機関や地域住民等と連携しながら、河川及び流水の適正な管理に努める。

<河川環境の整備と保全>

河川環境の整備と保全に関しては、中下流部においては、急速で人工的な厳しい河川環境の中でも生息してきた種の水鳥・水生・繁殖環境の保全と再生に努める。

上流部の河川沿いの植生が生物にとって良好な環境を形成しているため、河川整備にあたっては、植生環境の保全に配慮する。

また、河川景観に関しては、歴史・文化施設や温泉等を資源とした観光地である伊豆山地区のまちづくりと調和した美しい景観が形成されるよう、河川整備や維持管理に際して、熱海市や地域住民等との調整や連携を図ることとする。

■河川の維持管理に関する事項

河川の維持管理に関しては、災害の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持及び河川環境の保全の観点から、河川の持つ多面的機能が十分に発揮できるよう熱海市などの関係機関や地域住民等と連携し、護岸等の治水に重要な河川管理施設の機能を確保するため、平常時及び洪水発生後における巡視、点検を適切に実施する。また、河道の状態や自然環境、土砂堆積の状況等を把握し、必要に応じて補修・修繕を実施するなど、良好な状態の保持に努める。

また、砂防堰堤などの河川内工作物等についても適切な維持管理を行うとともに、占用工作物管理者にも働きかける。

■地域との連携と地域発展に関する事項

歴史・文化・温泉等の観光資源の多い伊豆山地区を流れる逢初川を地域の財産と捉え、復興・地域発展に活用できるよう、熱海市における地域振興やまちづくりなどに関する計画との調整、連携に努める。

また、熱海市や地域住民と連携し、教育機関における河川防災教育や、河川愛護の意識を啓発する取組等の充実に努めるとともに、河川整備に関する情報や施策を積極的に発信することにより、地域住民や観光客等が河川に対する関心を高める取組を推進する。

治水事業の沿革と現状

- 伊豆地方・熱海市は狩野川台風(1958年)をはじめ、度重なる台風・豪雨災害が襲来してきたが、逢初川(伊豆山地区)においては甚大な水災害は記録されていない。
- 逢初川中流部では、生活道路等の利便性の観点から1960年頃に一部区間(逢初橋から上流へ約300mの区間)が暗渠化された。(地元ヒアリングによる)
- 市道伊豆山神社線の上流区間では、昭和62年から平成11年にかけて河川改修が行われている。
- 急斜面が多い当該地区では、各所で土砂災害防止法の特別警戒区域及び警戒区域が指定されており、逢初川本川及び支川も土砂災害警戒区域(土石流)に指定されている。また、本川上流には土砂災害防止のための砂防堰堤が整備されている。(H11.11完成)
- 令和3年(2021年)7月豪雨では7月1日から3日にかけて断続的に雨が続き、3日の10時30分頃、逢初川の上流域で発生した大規模な土石流が住宅地を流下し、死者・行方不明者27名という未曾有の被害をもたらした。
- 上流域の土砂流出防止対策については、「逢初川土石流災害対策検討委員会」での助言を踏まえ応急安全対策を行うとともに、直轄砂防事業により既設堰堤下流への砂防堰堤新設や既設堰堤の土砂撤去等の対策を進めていく。
- 逢初川(伊豆山地区)における津波被害に関しては、大正12年(1923年)に発生した関東大地震により、沿岸部に高さ2m程度の津波が到達した記録が残っているものの、被害に関する記録はない。
- 静岡県第4次地震被害想定で公表されたレベル1に対する津波においては、人家等の被害は想定されていない。
- 「熱海市泉地区・伊豆山地区における津波対策の方針 H29.10 静岡県・熱海市」において、レベル1津波に対しては人家等の浸水が想定されないことから新たな施設整備は行わないものとし、レベル2津波に対しては住民や観光客等の迅速かつ主体的な避難を最重要の対策と位置づけ、熱海市津波避難計画に基づく避難を後押しするソフト対策を推進していく方針としている。

河川の環境

- 水質については、逢初川の類型指定は行われていないが、熱海市では環境基準C類型の達成を当面の目標としている。逢初川では熱海市が水質観測を3地点(消防団第4分団詰所、逢初橋、熱海ビーチライン)で行っており、観測値はいずれも環境基準C類型を満足している。
- 伊豆山神社のある標高200mから岩戸山(標高734m)南麓にかけては、コナラ群落、クロマツ植林等の樹木に覆われているが、それより低い標高の場所には市街地が広がっている。
- 上流域においては、河川沿いの植生が残る天然河岸であるが、幹川流路の多くは住宅地を流れており、河道はコンクリート三面張り護岸、落差工、暗渠等によって構成されている。また、全川に渡り急勾配なため、平常時の流速が速く、生物が生息・生育することは極めて困難な環境である。
- 文献に記録のある重要な種として、上流の自然河床が残されている区間では水辺に生息するツギガエル、モリアオガエル、ゴイサギ、ヤマザシガキが生息している可能性がある。
- 河口部では、近隣河川で確認された回遊性のユゴイやニホンウナギが生息している可能性があるが、逢初川には定着できるような環境がないため迷入する程度と考えられる。

河川の利用及び住民との関わり

- 逢初川水系には、水利権(慣行水利権含む)や、河川を利用する共同漁業権は設定されていない。
- 伊豆山地区の上水道は柿田川を水源とする駿豆水道を利用している。
- 中流部の住宅地周辺を流下する区間は、暗渠構造となっている区間も多く、水際に近づける階段やスロープは設置されていない。
- 河川愛護や、川を利用した環境学習等の活動は行われていない。